

錢形平次捕物控

歎きの菩薩

野村胡堂

青空文庫

一

「親分、あれを聞きなすつたかい」

「あれ？ 上野の時の鐘なら毎日聞いているが——」

銭形平次は指を折りました。ちょうど辰刻（八時）を打つたばかり、——お早うとも言わず飛込んだ、子分のガラツ八の顔は、それにしては少しあわてております。

「そんなものじやねえ、両国的小屋——近頃評判の地獄極楽の活人形（きにんぎょう）の看板になつてゐる普賢菩薩（ふげんぼさつ）様が、時々泣いているつて話じやありませんか」

一流の早耳、八五郎はまた何か面白そうな話を聞込んで来た様子です。

「地獄極楽の人形は凡作だが、招きの普賢菩薩が大した名作だつてね」

「さくにん作人またろくは本所緑町の仏師又六、大した腕のある男じやねえが、あの普賢菩薩だけは、後光が射すような出来だ。そのうえ木戸番のお倉てえのが滅法いい女で、小屋は割れつ返るような入いりですぜ」「お倉と普賢菩薩を拝んで、極楽も地獄も素通りだろう。そんな野郎は浮ばれねえとよ」

「全くその通りさ、親分、——その普賢菩薩が、時々涙を流して
いるから不思議じやありませんか、岡つ引冥利みょうり、一度は見てお

かなくちゃ——」

「手前てめえはもう五六遍見ているんだろう。懐ふところの十手なんかを突つ張ぱらかして、口ハで小屋を荒らして歩いちゃ風ふうが悪いよ」

「冗談でしよう、親分」

ガラツ八をからかいながらも、銭形の平次は支度に取りかかりました。両国の活人形が泣いているというのは、どうせ勧進元かんじんもとのサクラに言わせる細工で、ネタを洗えば人形の眼玉へ水でも塗るんだろう——ぐらいに思つたのですが、それにしても、少し細工が過ぎて、なんとなく見逃し難いような気がしたのです。

「出かけようか、八」

「へエ——、本当に行つてみる気ですか、親分」

「岡つ引冥利、お倉と普賢菩薩は拝んでおけと——たつた今手前
が言つたじやないか」

「お倉だけは余計ですよ、——ところで親分、行つてみるのはいいが、朝でなくちや泣いていませんよ」

「寝起きの機嫌の悪いお倉だ」

「お倉じやねえ、泣くのは仏体で」

「あ、そうそう」

平次はまだからかい面づらですが、気の合つた親分子分は、こういつた調子で話しながら、お互の微妙な心持を、残すところなく伝える術すべを知つてゐるのでした。

「明日の朝にしちやどうでしよう、親分」

とガラツ八。

「早い方がいいぜ、明日行つてみたら普賢菩薩が笑っていたなんてえのは困るだろう。そうなると、岡つ引より武者修業を差向けて方がいい」

「口が悪いな親分、もつともここから向う両国までは一と走りだから、涙の乾く前に着くかも解らない」

二人は無駄を言いながら、朝の街を飛ぶように、両国橋を渡つて、地獄極楽の見世物の前に立つた時は、もう気の早い客が、五六人寄せかけておりました。

「いらつしやい、御当所名題なだいの地獄極楽活人形いきにんぎよう、作人の儀は、江戸の名人雲龍斎うんりゆうさい又六、——八熱八寒地獄、十六別所べっしょ、小

地獄、併せて百三十六地獄から、西方極楽淨土まで一と目に拝まれる、一流活人形はこちらでござい」

木戸番はお倉という新造しんぞう、塩辛声の大年増と違つて、こいつは水の滴したたるような美しさを発散しながら、素晴らしい桃色の次高音トでお客を呼ぶのでした。

襟えりの掛つた少し地味な銘仙めいせん、繻子しゆすの帯、三十近い身柄ですが、美しさや声の韻においから言うと、せいぜい十九か二十歳はたちでしよう。白お粉しろいつ氣なしの疣尻卷いぼじりまき、投げやりな様子も、一種の魅力で、両国中の客をここへ吸い寄せたのは、何としても普賢菩薩のせいばかりではないようです。

「八、大層な木戸番だな」

と錢形の平次も少し感に堪えます。

「ね、親分」

八五郎のガラツ八は、呑込み顔に顎あごをしゃくると、平次の後から狭い木戸を通りました。

二

「なるほど、これは凡作だ」

平次も驚きました。地獄極楽の活人形は話に聞いた通りの凡作で、凄味も有難味もありません。

「閻魔えんま大王だいおうがくしやみをしそうですぜ」

ガラツ八は袖を引きます。

「馬鹿野郎、そんな罰の当つたことを言つちやならねえ」

「菩薩方の張り店ときた日にや親分——」

「黙らないかよ、八」

二人は漸く評判の普賢菩薩の前にたどり着いておりました。

「これは大したものだ、まるで作が違う」

白象に乗つた、等身大の菩薩像は、見世物小屋の方、囃子方はの陣取つた中二階の下あたりに据えてあります。

少し彩色は濃厚すぎますが、実に非凡の出来栄え、右手に金剛杵を持ち、左手に金剛鈴を執つた慈悲の御姿みすがた、美妙びみょうと

言おうか、端麗と言おうか、あまりの見事さに平次もしばらくは

言葉もありません。

「親分、あの仏様の眼を見てやつて下さいよ、少し濡れているで
しよう」

とガラツ八。

「眼ばかりじやねえ、宝冠の瓔珞ようらくから、襟も肩もぐつしよりだ。
頭の上から涙を流すのは、仏様にしても可怪おかしくはないか、八」
「へエ——」

「冠も頬も襟も汚れているのは、勧進元の細工にしちや念入りす
ぎるぜ、それに、夜が明けてからもう二た刻とき（四時間）も経つて
いるのに、涙の乾かねえのも不思議じやないか」

平次は稼業柄で、妙なところへ気が付きます。

「……」

「八、手前涙の味を知つてゐるかい」

「近頃はトンと泣かねえが、子供の時お袋に叱られて泣いている
と、口へ涙が流れ込んだことがありますよ。汗みたいな塩つ辛い
味だと思つたが——」

ガラツ八もこう言うより外はありませんでした。普賢菩薩の涙
を見上げてゐる平次の態度が、洒落しゃれや冗談とは全く縁のない生真
面目なものだつたのです。

「手前も仏様の涙を舐なめた事はあるめえ、ちよいとやつてみな
「あつしが？」

「人間の涙は塩つ辛いが、勧進元の細工なら味があるわけはねえ、

本当に仏像の涙なら甘露かんろの味がするかも解らないじやないか」

「へエ——」

「幸い朝のうちに小屋の中はガラ開きだ。今のうちにしようと舐めてみな」

「親分、そりや本当ですかい」

ガラツ八も驚きました。日頃言い付けに反そむいたことのない親分

の言葉ですから、大概の事なら聞くつもりですが、仏様といつても、見世物小屋の活人形の眼に溜つた、得体の知れない水を舐めてみろと言われたには驚いたのです。

「嫌かい」

「嫌いやありませんが——ね」

「岡場所のドラ猫みたいな妓の頬べたを舐めるんじやねえ、これでも仏様だ。誰が笑うものか、安心してやつてみな」

「安心していますよ、——驚いたな、どうも」

「嫌なら止すがいい、俺がやる」

銭形平次ともあろう者が、本当に中二階へ登りそうな様子になるのです。

「じよ、冗談じやねえ、銭形の親分がそんな事をした日にや、江戸中の物笑いだ。あっしがやりますよ、やりますとも」

親分思いの八五郎は、こうなるともう悪びれませんでした。普賢菩薩の涙を舐めてみろと言う平次の言葉には、何か重大な底のあることは、もう疑う余地もなかつたのです。

八五郎は黙つて 梯子はしごを登ると囃子方の中二階へバアと顔を出し
ました。

「お前さん、そこへ登つちや困るじゃないか」

後ろから引下ろしそうになる男は、八五郎が懐からちよいと、
十手まばを覗かせるとそのまま黙つて引つ込んでしまいました。

疎らになつて いる客は、もとより八五郎のとんでもない冒険の
意味などを知るはずもなく、木戸番のお倉は、委細構わず、素晴
らしい次高音アルトを響かせて、両国中の客を、鉄片を吸う磁石のよう
に、ここへ集めております。

中二階に登つて及び腰になると、ちょうど仏体に手が届きます。

「…………」

仏像の涙を薬指に付けて、ほんの少しばかり舐めた八五郎の顔を、平次は世にも面白そうに見上げました。

「どうだ、八、塩つ辛いだろう」

降りて来たガラツ八を迎えるように、平次はこう言うのでした。
「どうしてそれが？」

「白く塩が溜っているじゃないか、あれが塩つ辛くなきやア、どうかしているよ」

三

それから三日目。

「親分、大変ツ」

それとはなしに、東西両国を見張らせていたガラツ八が、鉄砲玉のよう[。]に平次のところへ飛込んできました。

「どうした、八、普賢菩薩が笑い出したか」

「そんな事なら驚かねえが、今度は殺しだ」

「何？」

平次はピンと弾き上げられたように坐り直しました。

「両国には相違ねえが、あの小屋からずつと離れた亀^{かめ}沢^{ざわ}町^{ちょう}[。]の路地に若い男が、殺されているが、困つたことには見知り人^{みしん}人がね

え」

「行つてみよう、死骸はまだそのままだらうな」

「檢屍が済むまでは、指も差させねえよう、町役人に頼んで来ましたよ」

「そいつはいい 塩梅だ」

平次とガラツ八はそのまま両国へ――。

人混みを搔き分けて入ると、亀沢町のとある路地に、紅い鹿の子絞の扱帶で首を絞められた若い男が虚空を掴んで死んでいるのでした。

唐桟の素袷、足袋跣足のまま、雪駄を片つぽだけそこに放り出して、少し天眼に歯を喰いしばつた死顔の不気味さ、男が好いだけに凄味がきいて、赤い扱帶に、蒼い顔の反映も、なんとなくゾッときせるものがあります。

「おや、 錢形の」

「三輪の兄哥みのわ あにきでしたか」

嫌な者に逢つたとは思いましたが、平次はさすがに、縄張にこだわる男ではありません。

「この辺は石原の親分の縄張だが、錢形のは利助兄哥りすけあにいに頼まれていなさるてえじやないか」

「どんでもない」

平次は少し尻込みしました。やくざや遊び人と違つて、岡つ引御用間に縄張などがあるわけはなかつたのです。

「それじや俺が出しゃ張つても、文句はあるまいね」

「それはもう、三輪の兄哥、お互にお上の御用を承る身体だから、

一刻も早く犯人を挙げさえすりやいいわけで

「下手人はもう拳がつたよ」

「？」

三輪の万七のニヤリとする顔を見ると、ガラツ八はそっぽを向いてペツと唾つばきを吐きました。

「この上、銭形のが来たところで、気の毒だが仕事はあるめえよ」
万七は言いたい放題の事を言うと、背を向けて人混みの中へ顎あごをしやくりました。

「親分、参りましようか」

子分の者が二人、物々しくも縄を打つて引いて来たのは地獄極樂人形の小屋に居る美しい木戸番、あの両国中へ桃色の次高音を

アルト

撒き散らしている、お倉だつたのです。

「銭形の親分さん、お助け——」

お倉は摺れ違いざま、平次の耳に囁きました。ささや細りした身体が、ほつそ後ろ手に縛られると一倍萎しおれて、消えも入りそうなのが、何とも言えない痛々しさです。

「……」

平次は黙つてそれを見送りました。が、三輪の万七とお倉の姿
が見えなくなると、

「八、手を貸せ、少し調べてみよう」

死骸の傍そばに立ち寄ると、物馴れた様子でそれを抱き起しました。

「親分、大変な怪我じやありませんか」

とガラツ八。

「それだよ、見ろ、八、身体中傷だらけじやないか」
 死骸の帯を緩めて、双肌脱ゆる_{もうはだ}がせると、背から尻へかけて、一面の青痣あおあざ、それに相応して着物の破れなどのあるのを確かめる
 と、

「袋叩きにされたんだね、女一人の仕事にしちゃ、少し念が入りすぎだよ」

平次はそんな事を言いながら、髏節まげぶしの中から、足の下まで、恐ろしく丁寧に調べております。

「雪駄せつたの片つ方がありや、下手人の見当はすぐ付きますね、親分」
 とガラツ八。

「馬鹿だね、その雪駄の片つ方はお倉の家にあつたのさ、しごき 扱帶が
お倉のだというだけじゃ、三輪の万七ともあろう者が、女を縛る
わけはねえ」

「なるほどね、お倉の家——てえのは、いざれこの辺でしようね」
「細工の器用なところを見ると、すぐそこつてことはあるまいが、
いざれ十軒とは離れちやいまい、訊いてみな」

平次が言うまでもありません。好奇心でハチ切れそうになつて
いるお立会いの衆は、路地に入つて三軒目がそれで、母親と二人
で住んでいるお倉が、あれほどの縲緼きりようを持ちながら、茶屋女に
も町芸妓まちげいしゃにもならず、進んで、両国の見世物小屋へ、ここから
通つているのだと教えてくれました。

「身^{みなり}から、身体の様子、^{のみだこ}鑿^{ほりものし}膩^{のじょく}の具合を見ると、居職^{いじょく}の——
それもたぶん彫物師^{ほりものし}というところだろう——見知り人があるはずだ、その辺で当つてみな」

「へエ——」

八五郎は一とわたりお立会いの衆を眺めましたが、馴れた眼で見当を付けると、何となく落着^{おちつけ}き兼ねた中老人を捕まえて、
「お前さんは知つていなさるだろう、掛け合いなんかにはしない、
殺された男の身許だけでも教えてくれ」

单刀直入に訊いてみました。

「本当に掛け合いになりませんか」

「それはもう

この頃の人が、どんなに事件に掛り合いになるのを恐れたか、今の人には想像もつかない心理があつたのです。

「仏師の勘兵衛さんですよ」

「エツ」

「二代目 一刀斎勘兵衛、——若いが名人と言われた人です」

「そりや大変だ」

銭形の平次が乗り出した時は、中老人は早くも人混みの中に姿を隠してしまった時でした。

四

平次がすっかり緊張して、検屍の役人が来るまでの、たつた四

はんとき
半刻（三十分）ばかりを、恐ろしく能率的に使いました。

「親分、あのお倉というのは、勘兵衛の元の女房だつたそうです
よ」

早耳のガラツ八は、ちょっと姿を隠した間に、これだけの事を
聞き込んで来ました。

「どこでそんな事を聞き出したんだ」

「地獄極楽の活人形を彫つた作人雲龍斎又六の弟子は皆んな知つ
てまさア」

「それを承知で、又六はあの小屋に使つていたのか、——勘兵衛
と又六は商売敵で、恐ろしく仲が悪かつたはずだが」

「又六はそんな事を知つていたか知らなかつたか、とにかく弟子達がよく知つていて、師匠の又六が小屋へ出るたんびに、お倉へ優しい声をかけるのを、蔭で笑つていましたよ」

「そうか」

「そう解れば、勘兵衛を殺したのは、やはりお倉じやありませんか」

とガラツ八。

「勘兵衛がお倉を殺すなら解つているが、お倉が勘兵衛を殺すのはどういう訳だ」

「世間じや、お倉が勘兵衛を捨てて飛出したつて言うが、その実、勘兵衛がお倉を追出したのかも解りませんぜ」

「そんな事はどうでもいいが、——女が一人で若い男を袋叩きに出来るかい」

「袋叩きにしたのは他の者で、ヒヨロヒヨロになつてここへ來たところをお倉が殺したとしたら?」

「そんな事があるものか、雪駄が片つぽお倉の家にあるというのに、勘兵衛の足袋たびは両方とも底が綺麗だぜ」

「あツ」

「そんな事を言つていると、三輪の親分に笑われるばかりだ——」

「それじや親分」

「勘兵衛を殺したのは大の男さ、——それより、地獄極楽の小屋へ行つて、見付けたいものがある、——ちょうどお役人が見えた

ようだ、ここはお任せして引揚げようか

「……」

平次の明察の底の深さを知つてゐるガラツ八は、そのまま黙つて後ろに従いました。そこから五六町、小屋は尾上町おのえちようの角、川沿いの空地に区画を施した、半永久的の粗末な建物だつたのです。二人が小屋へ入つた時は、まだ木戸を開けたばかり、お倉に比べると一向魅力のない大年増が、型のごとく塩辛声を振り絞つておりますが、どうした事か、更に客の入る様子はありません。

「御免よ」

「へエ、いらっしゃい」

「客じやねえ」

「おや、銭形の親分さん、おみそれ申しました、どうぞこちらへ」

「又六師匠はこちらへ来なさるかえ」

「毎日参りますが、たいがい夕方で」

「あたり収入の勘定だろうね、まあ繁昌で結構だ」

「へエ——、どういたしまして」

又六の弟子で、小屋の取締りを兼ねている、中年者の巳之吉はヒヨコヒヨコと卑屈らしく小腰を屈めました。

「お倉が縛られたってね」

平次はその顔を真っ直ぐに見詰めながら、ズバリと言つて退け

ました。

「へエ、元の亭主を殺したんだそうで」

「たいそう早耳じやないか、俺も今それを聞込んだばかりなんだ
が」

「……」

「まあ、いいや、ちょいと小屋の中を見せて貰おうか」

「へエ——」

ズイと入ると、中は空っぽも同然、地獄の活人形に朝の陽が射
し込んで、何となく不気味なうちにも、拙劣^{せつれつ}な細工が醸^{かも}し出す、
滑稽^{こつけい}な趣があります。

平次はそんなものには眼もくれず、真っ直ぐに普賢菩薩^{ふげんぼさつ}に近づ
きました。傍^{そば}へ寄つて触つてみると、白象は蠟細^{ろうざいく}工に綿を着せ
たもので、恰好は出来ておりますが、上に乗つた普賢菩薩の、優

れた尊像とは似も付かぬ誤魔化し物です。

「ガラツ八、その踏台を持つて来てくれ」

「へエ——」

象の下に踏台を据えさせると、平次はその上に乗った菩薩を少し上げ、台座の下から覗きました。

「この銘は一度書いたのを削つてまた書き入れたようだね」

「一向存じません」

巳之吉は酸っぱい顔をしております。

「八、その辺に手桶ておけがあるだろう、搜してみな」

ガラツ八を中二階へやつて、平次は下から声を掛けました。

「搜すまでりませんや、ここにありますぜ」

とガラツ八。

「その中に水が入つてゐるだろう、ちよいと舐めてみてくれ

「ヘエ——」

「ほんの少し塩つ辛いだろうと思うが」

平次は妙な事を言い出しました。

「あツ、これはやはり仏様の涙ですかい」

「そうだよ」

「恐ろしく涙を出したんだね」

五

「これは銭形の親分、御苦勞様で」

小肥りの中年男が、丁寧に平次へ挨拶しました。

「お前さんは？」

「雲龍斎——え、その又六でございますが」

「あ、雲龍斎師匠でしたか、とんだ災難で」

「有難うございます、——この小屋も半分はお倉のお蔭で繁昌して、いたようなもので、当分代りを捜すまでは、人気を取り戻せそうもありません」

「なアに、普賢菩薩の評判が大したものだから、そんな心配もありますまいよ」

「有難うござります」

「その人気を独り占めにしている菩薩様が少し汚れたようですね、あれはやはりサクラを使つて泣かせるんでしょう——」

「親分、御冗談を」

又六は少し照れ臭い顔をしました。が、この顔には、どんな感情も紛れさせる、不斷の微笑が、さざ波のように動いているのです。

「ところで師匠、お倉は勘兵衛の元の女房だという話ですが、お前さんそれを承知で雇いなすつたかい」

と平次、さりげないうちにも、次第に問題の核心に触れて行きます。

「少しも存じませんよ、ツイ今しがたそれを聞かされて、びつく

りしていたようなわけで、ヘツ、ヘツ

「お前さんは、大層お倉に親切だつたつていう噂うわさだが——」

「親分、からかいなすつちやいけません。そんな馬鹿な事が——」「まあいいやな、ハツハツハツ」

平次は他愛もなく笑いながら、軽い心持で小屋を出ました。

川岸かしつぱちを相あい生おいちょう町まちの方へ少し行くと、物蔭から不意にガラツ八が飛出します。

「ありましたよ、親分、主ぬしのない小舟こうしゅうが一艘そう、小屋の後ろに繫つなぎつ放しで——」

少し獅子うごめつ鼻くのこが蠢うごめきます。

「そうだろうと思つたよ、勘兵衛の家は浜町だ。橋番所があるか

ら、明け方表から小屋へは忍び込めねえはずだ

「見透しだね、親分」

「おだてちやいけねえ」

「下手人は解りましたか」

「大方解つたつもりだが、証拠というものが一つもねえから、捕まえることもどうすることも出来ない」

平次は深々と腕を拱きました。

「誰です、その下手人は」

「手前だけに言つておくが、あの肥つちよの、ニヤニヤした野郎だよ」

「えツ、雲龍斎又六？」

「黙つていな、大きな声を出すと鳥が飛ぶぞ、しばらく万七兄哥あにきに楽しませておけ」

六

銭形の平次はそれから必死の活動を始めました。

地獄極楽の小屋の者は、巳之吉みのきち初めて一人残らず調べ上げた上、
お倉の母親から、雲龍斎うんりゆうさい又六またろくの動き、一刀斎勘兵衛いつとうさいかんべえの家
まで、念には念を入れて捜し抜きましたが、その晩、お倉の家へ
勘兵衛らしい男が訪ねて来ると、お倉は母親を原庭はらにわの叔母のと
ころへ泊りにやつた——という以外には、何にも得るところもな

かつたのです。

平次が一番怪しいと思つた又六は宵のうちに緑町の自分の家へ帰つて、それつきり急ぎの仕事に取りかかり、夜中まで鑿のみを使つていたというのは、内弟子も近所の者も口が合つて少しの疑いを挟む余地はありません。

調べて来れば、やはり一番怪しいのはお倉ということになりますが、肝かん腎じんのお倉は三日三晩の責めにも我慢を通して、知らぬ存ぜぬの一点張です。

「自分の扱帶しごきで殺して、そのままにしておくのは可怪おかしいではな
いか」

最後に与力の笹野新三郎にそう言われると、三輪の万七もこの

上女を責めようはありません。

が、事件は四日目になつて、思いもよらぬ方面へ発展してしまいました。

「親分、又六が殺^やられましたぜ」

「何？ そんな馬鹿な事があるものか」

ガラツ八の報告を聞いた時、平次は危うく日頃の冷静さを失うところでした。

勘兵衛殺しの下手人^{にら}と睨んで、一生懸命証拠の蒐^{しゆう}集^{しゆう}に浮身をやつしている矢先、肝腎の又六が殺されてしまつては、平次は全く背負投げを喰わされたようなものです。

「自害じやあるまいね」

「^{のみ}^{うしろ}で背後からやられる自害はあるでしようか、親分」

「……」

銭形の平次ほどの者も、見事にガラツ八にしてやられました。
「その鑿が、浜町の勘兵衛の仕事場から出た品ですよ、柄には丸
に勘の字の焼印が捺お^えしてある」

「えツ」

「親分、大きい声じや言われないが、世間じや勘兵衛の幽靈がや
つたんだって言つてますぜ」

ガラツ八は少し迷信家らしく脅えた眼を見張りました。

「馬鹿な、そんな事があるものか、幽靈が人を殺す世の中になつ
ちや、岡つ引は上がつたりだ、行つてみよう」

真つ直ぐに向う両国へ——。

鎖した木戸を開けさして、真昼ながらなんとなく薄暗い小屋の中へ入ると、彫物師の雲龍斎又六は中二階の揚幕あげまくの蔭、ちょうど、普賢菩薩を見張るような位置に、仰向あおむけになつてこと切れているのでした。

得物は彫物ほりもの師の使う鋭い鑿、焼印はガラツ八が言う通り、得物が深々と入つたせいか、大した出血ではありませんが、それでもその辺は一面の血飛沫ちしぶきです。

引起して明り先に死体の顔を持つて行くと、日頃さざ波のように寄せている微笑は消えて、——何という悪相でしよう。少し脹はれっぽい顔には、微塵みじんも又六の柔和にゅうわなおもかげが残つてはおり

ません。

「おツ」

平次も、ガラツ八も、思わず顔を背けました。獲物を覗う^{ねら}_{そむ}吸血鬼のような、ギヨ口リとした死骸の眼が、二度と見られないような物凄いものだつたのです。

小屋の者は一人残らず、埃を叩くように調べ上げられました。^{ほこり}

が、宵のうちに又六は帰つたと言うだけで、ここに踏み留まつていたのさえ知らなかつたくらいですから、下手人の見当などは、まるつきり付きません。

筋合から言えば、勘兵衛の元の女房のお倉が、一番疑われる立場にいるわけですが、この時はまだ二三日前に許されたばかりで

すから、どんな大胆な女でも、見張りの目を誤魔化して家を抜け出し、大それた人を殺す隙すきがあるわけもなく、第一、たつた一と突きで息の根を止めたのは、鑿が鋭利だつたにしても、女の業わざには容易のことではありません。

巳之吉は真つ先に挙げられましたが、これは万七の気休めみたようなもので、何の役に立つほどの事も知つてはいなかつたのです。

そのうちに、二日三日と経たちました。

「親分、あの普賢菩薩は又六の作じやないつて話がありますよ」
ガラツ八は妙な事を聞込んで来ました。

「俺もそう思うよ」

「へエ、親分はそれを知つてなさるんですかい」

「知つてるわけじやないが、地獄極楽の活人形とは、あんまり手際が違ひすぎる。それに、あの仏体の台座を見ると、銘を削つて書き変えた跡があるんだ」

「へエ、——驚いたなア、どうも」

「雲龍斎又六は、高慢に構えているが、あれは下手へたつ糞くそだよ」

「すると、あの仏体は誰の作でしよう」

「それが解らぬ」

「この間殺された勘兵衛じやありませんか。二代目一刀斎勘兵衛は、親の初代一刀斎に優まさる名人と言われていますが」

「いや、——俺には腑ふに落ちないことばかりだ」

「親分」

「手前は死んだ勘兵衛の身許を洗ってくれ。親の初代一刀斎勘兵衛は、五年前に禁制の切支丹きりしたんの像に紛らわしい物を彫つて、遠島になつたはずだ」

「へエ——」

「俺はお倉を縛つて泥を吐かせてみる、どうもやはりあの女が臭い」

「三輪の万七親分が一度縛つて許したばつかりじやありませんか」「その通りだよ」

「勘兵衛の足袋あしぶき_{たび}の底はどうなんです。わざわざ自分の赤い扱帶しおきで殺して、死骸の雪駄せつたを片つ方だけ自分の家へ持つて來たんですか

い

ガラツ八もなかなか深刻です。

「人の口真似をするな」

苦り切つた平次。

「三輪の子分衆の見張つている中を抜け出して、鑿のみを男の背中へ

叩つ込むほどの腕があの女にあるでしようか」

「出来ない事じやないよ。母親おぶくろと共謀ぐるでやれば、思いの外手軽

に抜け出せるし、鑿は、又六が居眠りでもしているところを狙つ

て背後うしろから玄翁げんのうか何かで叩き込むんだ」

「へエ——、驚いたなア」

七

お倉はとうとう平次の手で縛られました。容易に人を縛らぬ銭形平次が、しかも、三輪の万七が一度許したのを縛つたのですから、お倉の罪はほとんど確定的のものと見ても差支えなかつたでしょう。

「へエ——あの女が、大の男を二人も殺したのかい」

江戸つ子は舌を巻きました。元の夫一刀斎勘兵衛を殺し、続いて、主人の雲龍斎又六を殺したとすれば、磔^{はりつけ}刑か火焙^{ひあぶ}りは免^{まぬか}れぬどころでしよう。

驚いたのはガラツ八の八五郎でした。

「親分、大丈夫ですか」

「何が？」

平次は近頃すっかり不機嫌です。

「お倉を伝馬町へ廻して、牢問い合わせに掛けるそうじやありませんか」「その通りだよ。どうしても白状しないんで、 笹野の旦那もすつかり持て余しなすつたよ、この上は伝馬町に送つて、牢屋同心の手でうんと責めることになつたのさ、女のしぶといのばかりは、痛め吟味ぎんみより外に手がない」

「へえ、あの女をですかい」

「海老責えびせめ、 算盤責そろばんせめ、 車責くるまぜめ となると、女が美しいから見物だろ

うよ」

「……」

ガラツ八も黙つてしましました。人一倍涙脆もろくて、思いやりのある平次が、ケ口リとしてこんな事を言う心持が解らなかつたのです。

「そんな事より、頼んだ事はどうだつたい」

「それですよ親分、不思議なことがあるもので——」

ガラツ八は膝ひざを乗出しました。

「小屋で殺された晩も、本人の又六は緑町の自分の家で、
まで鑿のみを使っていたつて——近所の衆は言つたろう」

「えツ、どうしてそれを親分」

「そう来なくちや、テニヲハの合わないことがあるんだ」

曉あけ
方がた

「驚いたなア、どうも」

殺された本人が、自分の家で暁方まで働いていたというのは、一体どういう意味でしよう。

「八、少しばかり絵解きをしてやろうか」

「へエ——」

「勘兵衛が殺された晩、又六は内弟子を自分に仕立てて、仕事場へ置いたんだ。その細工が過ぎて自分が殺される晩も、替かえだま玉に仕事場でゴトゴトやらしたのさ。まさか、その晩、自分が殺されるとは思わなかつたろう」

「へエ——、ある」

ガラツ八は一応感心しましたが、まだ、お倉を疑う気にはなれ

ません。

が、事件は次第に緊張して、お倉牢問い合わせの物凄い噂がどこからともなく、物好きな江戸つ子の耳に伝わりました。

「昨日は石を抱かされたとよ、三度も目を廻して、腰から下が寒天のように碎かれても、口を割らないそうだ、女の剛情なのは怖いぜ」

そんな話が、口から口へと、野火のよう^(のび)に拡がつて行きます。
それから二日目。

「銭形の親分にお目に掛つて申上げたいことがございます」

妙におどおどした五十男が、平次の家へそつと訪ねて來ました。
「お待ちしていました、さア、どうぞ」

平次は飛んで出ると、宵闇の中に、檻樓ぼろき切れのようたなづに佇む中老人を入れました。

「親分、私の申すことは、あまり変つてるので、びっくりなさるかも知れませんが、決して嘘や偽りは申しません——」

薄い膝においた手が顫ふるえて、上半身の骨張たくまった逞しさも、なんとなく不釣合な貧しい感じを与えます。

「私は何もかも知つているつもりですよ。勘兵衛師匠、みんな打明けて下さい」

「えツ、私の名を御存じで?」

「知らなくてどうしましよう。お前さんは江戸えど彫物ほりものの名人と言われた、初代一刀斎勘兵衛師匠さ。五年前人に頼まれて、切支丹の

像に紛らわしい物を彫つたばかりに、表向き遠島になるはずのところを、お上の御慈悲で江戸お構いになり、それつきり行方知れずになつた方だ」

「えツ」

「お前さんに出て貰いたいばかりに、あつしはいろいろ無理な細工をしましたよ」

驚き呆れる^{あき}初代勘兵衛の前へ、平次は膝を乗り出しました。

八

初代勘兵衛の話は、平次には耳新しいことばかりでした。

「私はお上の目を忍んで、三年前からこつそり江戸へ潜り込み、
蔭ながら倅せがれ二代目勘兵衛の仕事を助けてやりました。私はもう表
向きは遠島になつた蔭の人間で、どんな良い物を彫つたところで、
世間様へ名乗つてお目にかけることもならず、幸い倅が二代目一
刀斎を名乗つて、拙まづい物を彫つておりましたので、倅の銘で私の
作を、三年越し世間に出したのでござります。一つは彫物職人気か
質たぎとでも申しましようか、私は何にも彫らずにはいられなかつた
のでございます」

「…………」

多少予期した筋ですが、平次は神妙にうなずきながら、次を促
しました。

「倅は彫物下手でございましたが、私の彫った物に銘だけを入れて、——二代目は初代に優る名人だ——と世間様から申されました。どうせ世に捨てられた日蔭者の私の腕が役に立つて、倅の名前が世間に出来るのですから、私はこんなに嬉しいことはございません。この三年というもの私は本当に生き甲斐のある仕事を致しました」

「…………」

何という犠牲的な愛情でしょう。平次は黙つて涙を拭いました。自分の余命と芸術を、不肖の倅に捧げ尽して惜しまなかつた、初代勘兵衛の欺瞞は、何はともあれ、一応は許さなければならぬ種類のものだつたのです。

「昨年いっぱいかかつて、世にも人にも秘めて造つた普賢菩薩——あれは私の一代にも二つとない出来でございました。粉本には勿体もつたいないが、嫁のお倉を使つて、素木しらきのまま死んだ女房の供養に、菩提寺に納めるつもりでしたが、フトした手違いから、雲龍斎又六に横取りされたのでござります」

「やはりそうか」

「又六は倅の銘を削つた上、神々しい素木の仏像へ、見世物向きに、あんな下品な彩色をしてしまいました。——その上、自分の下手な地獄極楽の活人形と並べて、両国的小屋へ飾つたのですから、倅が腹を立てたのも無理はありません。その上、嫁のお倉は永年の貧苦に愛想を尽かして飛出し、人もあろうに又六を頼つて、

両国的小屋の木戸番にまでなり下がりました

「…………」

「後で、——あの普賢菩薩を奪られたのは嫁のお倉の手落ちだつたので、それを奪い返したきに、それが出来なければ、せめて他所ながら守護するつもりだつたと解り、一度嫁を怨んだのは相済まぬことと思いましたが、家出した当時は、打ち殺してもしまいたいほど腹を立てたものでござります」

「…………」

「それはともかく、僕は幾度も幾度も又六にかけ合つて、普賢菩薩を取戻そうとしましたが、又六は私が内々江戸へ帰つていることも、僕の代作をしていることも知つて、なかなか素直に言う事

を聞きません。一度などは、倅を捕まえて——お前にこの普賢菩薩ほどの物が彫れたら、望みの通り返してやる、宝冠だけでも、首だけでもいいからこの場で彫つてみろ——と、檜材ひのきざいと鑿のみを突きつけたこともあるそうでございます。そう言われると一言もありません。倅は親の私を庇かばわなければならぬいうえ生れ付き腕が鈍くて、台座の蓮華れんげ一つろくなものが彫れなかつたのでござります」

「……

「腕は鈍いが、倅は父親の私の彫った物は大事にしてくれました。どうどう我慢が出来なくなつて、小舟で浜町川岸から向う両国に渡り、手桶に隅田川の水をくみ込んで、嫁の手引で小屋に忍び込

み、せめても下品な彩色だけでも洗い落そうとしました。一度二度ならずそんな事をやつてみたそうですが、いつも妨げられて逃げ帰つたのでござります」

「ちようど上げ汐時に出かけるから、仏体を洗いかけた水には、いつでも塩氣があつた」

「親分は、そんな事まで御存じだったのですか」

「大概察していたつもりだ、——それがとうとう帰つて来なかつた。お前さんの彫物を洗いに行つた二代目勘兵衛さんは、又六の弟子どもに袋叩きにされて死んでしまつたのだよ」

「親分、私は口惜しゆうござります」

初代勘兵衛は肩を顛ふるわせて、畳の上へ双手もうろてを突きました。

小鬢こびん

の処ところが揺れて、涙がハラハラと膝に散りました。

「殺す気もなかつたろうが、打ちどころが悪かつたのだ。前からお倉にちよつかいを出していた又六は、お倉に彈はじかれて、ムシャクシヤしている矢先だつたので、樂屋にあつたお倉の披帶しぶきを死体の首に巻いた上、死体をお倉の家の前へ捨て、丁寧に雪駄せつたを片方お倉の家へ投げ込んでおいた」

「その通りでござります、親分、それだけ解つてゐるのに、どうして又六を縛つては下さらなかつたのでしょうか」

「証拠がなかつたのだ、——又六は腹の底からの悪党だ」

「親分、何もかもみんな申上げます、——いつまで経つてもお上で卒の敵を討つて下さる様子もないでの、とうとうたまり兼ねて

小屋に忍び込み、又六を鑿のみで突刺したのは、この私でござります。倅の敵討、こうでもしなければ、私の腹の虫が納まりませんでした。どうぞ、お願ひ、牢問にかけられているお倉を助けてやつて下さい、あの女は決して悪い女じやございません」

初代勘兵衛はとうとう言うべきことを言つてしましました。

「お倉は無事だよ、師匠いま逢わせて上げよう、——お静、お静」平次は隣の室へ声をかけると、すっかり目を泣き脹はらしたお倉は、平次の女房のお静に手を引かれて転げるようになってきました。「お、お倉じやないか、拷こうもん問されてているというのは——」

「父さん」

お倉は物も言えませんでした。初代勘兵衛の膝下へ、ただひた

泣きに泣いているばかりです。

「親分、さア、私に縄を打つて下さい。又六を殺したのは、確かにこの私に相違ありません」

初代勘兵衛は涙を納めると、屹きつと平次を振り仰ぎました。

「縛られてどうするつもりだえ、師匠」

「倅が死んだ上は、生きて行く望みもありません。私は表向き遠島になつた日蔭者、私の名では起上がりこぼし小法師一つ彫れません。

それにせつかく売り込んだ倅の名——二代目一刀斎は初代に優る名人——という名も惜しんでやりとうございます。このまま私を磔はりつけ刑なり獄門なりにして下さい。親分、私は生きているうちは、何か彫らざにはいられない因果な人間なのです」

思い入った初代勘兵衛の態度を見ると、お倉もおろおろするばかりで、今さら止めようもありません。

「処刑おしおきに上がる前に、所名前が知れるが、——そうすると、初代勘兵衛が江戸に居た事になる。構わないだろうか、師匠」

「えツ」

「二代目一刀斎勘兵衛の彫物は、みんな初代勘兵衛が代作してやつたという事が判つたら、死んだお前さんの体の名はまる潰つぶれだぜ」

「親分」

「悪い事は言わない、師匠、お倉をつれて、どこか江戸の岡つ引の手が届かないところへ行つて貰いましょうか。親の敵討が許さ

れるものなら、俸の敵討だつて許されないという理窟はあるまい

「……」

「世間へはこう言い触らそう、——二代目勘兵衛は又六が殺した、
又六は、又六は——あの普賢菩薩の尊像を二代目勘兵衛から奪つ
て、下品な色などをつけて見世物にした罰で、形の見えぬ鬼神に
殺された、——死んだ二代目勘兵衛の鑿のみで刺されたのは、因果と
いうものだろう——と」

「親分」

「サア、ここに居ると何かと面倒だ。一刻も早く私の目に見えな
いところへ姿を隠して貰おうか」

平次は立ち上がり、半紙に捻ひねつた小判で一二枚、お倉の手に

そつと握らせて、次の間へサツと引上げます。

「親分、恐れ入つたよ」

そこにはガラツ八の八五郎が、お静と二人、唐紙に凭れるよう泣いていました。

「親分、この御恩は一生忘れません、それじや、ずいぶん御機嫌よう」

初代勘兵衛はお倉を伴つて、春の日の往来へそつと滑り出ました。

*

初代一刀斎勘兵衛も、嫁のお倉も、それつきり江戸に姿を見せませんが、時々思いも寄らぬ土地から、一刀彫りの素晴らしい人形が、神田の平次のところへ送つて来ることがありました。諸国名物一刀彫の中には、この初代一刀斎勘兵衛が元祖だつたのが幾つかあつたはずです。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物控（六）結納の行方」嶋中文庫、嶋中書店

22004（平成16）年10月20日第1刷発行

底本の親本：「錢形平次捕物百話」中央公論社

1939（昭和14）年

初出：「ホール讀物」文藝春秋社

1934（昭和9）年5月号

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：結城宏

2018年4月26日作成

2019年11月23日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

歎きの菩薩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>